

「Field research in China 2014/2015 参加報告書」

京都大学経済学研究科 M1 羅先坪

まず今回の中国プログラムの内容を全体的に紹介する。3月16日に中国人民大学の陶然先生から授業「中国モデル」を受け、京都大学と中国人民大学の学生二名ずつが研究発表した。3月17日に政府部門「国家節能中心」と格付け会社「中誠信国際信用等級有限責任会社」（中誠信）をインタビューした。3月19日に中小工作機械製造企業「北京凝華科学技術有限公司」を見学した。

自分が特に感心したのはフィールドワークで訪れた3カ所で、詳細を以下にまとめる。「国家節能中心」において、担当の係員から中国省エネルギーの現状と当機構の機能を紹介された。そこから分かったことは、中国の「十二五」（2011年—2015年）計画の省エネルギーについて、6つの強制的目標がすでにほぼ達成されていることである。例えば単位GDPごとにエネルギーの利用が16%減少し、単位GDPごとに二酸化炭素の排出が17%減少しているなどである。当機構は中国発展改革委員会下で、40人から構成される機構であり、主な役割は、①マクロ的なコントロール強化、②目標責任の強化、③産業構造の改善、④重点工程を実施、⑤省エネ技術を普及、⑥中心企業管理である。具体的には、中国エネルギーの6割を消費する1.6万の企業たちを中心に審査を行い、不的確な設備を淘汰し、新しい設備と交換するのを促進する。これにより、小型火力発電所の減少、過剰生産（例えば鉄鋼4500トン、ガラス1億トン、セメント4.8億トン）を減少できた。現在、中国の環境汚染問題が厳しい状況にあり、政府部門の重視により問題改善につながる望みがでてきた。

「中誠信」は、中国国内にある6社の格付け会社の1つで、1992年設立、2006年にアメリカのムーディーズが株式の49%シェアを占め、合資会社となった。さまざまな企業、地方政府、金融機構で債権を発行するため、格付けを行っている。また、研究開発部門では、国家主権の格付けと債権市場のリスク分析をする。社員の9割は経済学修士資格を持ち、統計分析の能力を身に付ける一方、企業現場で調査することも必要である。人材育成に関しては、ポストドクター室を設置し、中国人民大学と連携している。

北京の工場エリアにある「北京凝華科学技術有限公司」（凝華）は、200人が属する典型的な製造中小企業である。1995年設立、切削・研磨用の金属工作機械を作る企業で、今後、規模の拡大を目指し（北京周辺の河北省で新工場を設立中）、高い技術が必要とされる高級品の方面へ展開する。その業績は工作機械製造の中小企業としては珍しい。2008年、リーマンショックで、中国江蘇省の工作機械企業の8割が倒産した。江蘇省の企業というと、ほとんどが低級品でかつ単一種類の製品を製造していた。それに対し凝華は、多品種、高品質の路線を維持してきた。その製品は航空宇宙事業、医療器械、専門技術学校などへ提供されている。

今回のプログラムを通じて、2点、大いに学んだことがある。1つめは言語である。私は日本に来て以来、英語の訓練の機会が以前より減少した。今回、東アジアコースのメンバーと一緒に行動し、日本語だけではなく、英語もたくさん使う機会があった。私の日本語能力、また英語能力も、実際に使用するとまだまだ不十分ことを痛感する。これからしっかり語学力を鍛えていきたい。2つめは問題意識の育成である。同じことを見ても、先生、先輩たちの問題意識はより深く、発見も早い。皆さんの問題提起や議論の中で、私も良い刺激を受けた。

今回、北京プログラム参加の機会を頂いて、京都大学に、推薦して下さった先生方に、一緒に参加したメンバーたちに、感謝します。能力を鍛えることができ、有難い機会、有難い経験になったと感じています。